2009筑波大学附属駒場論集49集

「科学者の社会的責任を考える」授業を作る

ー広島におけるフィールドワークの実践ー

（５年計画の３年次）

筑波大学附属駒場中・高等学校　社会科
大野　　新・小澤富士男・篠塚　明彦
丸浜　　昭・宮崎　大輔・宮崎　　章
吉田　俊弘

「科学者の社会的責任を考える」授業を作る

ー広島におけるフィールドワークの実践ー

（５年計画の３年次）

筑波大学附属駒場中・高等学校　社会科
大野　　新・小澤富士男・篠塚　明彦
丸浜　　昭・宮崎　大輔・宮崎　　章
吉田　俊弘

要約

一昨年度から始まった第二次スーパーサイエンスハイスクール（ＳＳＨ）の研究テーマとして、社会科では第一次に継続する「科学者の社会的責任を考える」を掲げた。また、プロジェクト研究においても「『科学者の社会的責任を考える』授業づくり」を掲げた。昨年度に引き続き、今年度も広島実習を行い、原爆の学習を通して科学者の社会的責任を考えた。また、高校２年生のゼミナール「地域に学ぶフィールドワーク」の現地調査もあわせて行った。本報告はその実習の記録である。

キーワード：フィールドワーク　科学者の社会的責任　広島　原子爆弾　社会科学習　ゼミナール

１　はじめに

昨年度の論集において、高校２年生のゼミナールの内容、広島実習の報告を行った。ここでは今年度においても実施した広島実習を中心に、ゼミナール「地域に学ぶフィールドワーク」の報告もあわせておこなう。

２　高２ゼミナール

「地域に学ぶフィールドワーク」

（宮崎　大輔）

2.1　今年度のゼミの狙い

平成 21 年 3 月告示の学習指導要領（２）のウ「生活圏の地理的な諸課題と地域調査」に見られるように、地理教育においては、従来から地域調査〈フィールドワーク〉の必要性が強調されている。地図化や情報の整理・分析といった地理的技能を獲得することに加え、実際に自分の足で地域を歩き、目で観察するといった直接的な体験が、最も効果的な学習活動の一つであることは論をまたないであろう。しかし通常の授業では、時間の制約や安全性の問題もあり、教室の外に出ることは困難である。そこで授業者は、画像や映像、シミュレーションやロールプレイングなど、多種多様な教材・方法を用いて工夫を凝らしているのが現実である。

本校のゼミナールという授業は、土曜日の午前中に設定されており、３～４時間程度のまとまった時間をとることができる。そのため、日常の授業において実施することが難しいフィールドワークを、ゼミナールの時間で行うことにした。

ここでいうフィールドワークの中には、本格的な調査・研究的を行う「地域調査」から、単に地域に出かけて学ぶという要素が強い「地域巡検」までを含んでいる。今年度は、生徒の興味に応じて３つのグループをつくり、各グループが主催するフィールドワークを一度ずつ行うことにした。その際、参加者全員の協力を仰いで「地域調査」を行ってもよし、単に地域へ出かけて皆で学習するという「地域巡検」でもよし、とした。

2.2　ゼミの実施概要

この講座を選択した生徒は 15 名であった。以下、全７回の授業について概要を述べる

１）ガイダンス「フィールドワークの方法」〈６月中旬〉

本ゼミナールの概要を説明した。また、各受講者の自己紹介の中から興味を持つテーマを探り、グループ分けの材料とした。

本校中学校からの連絡進学生は、中学時に「身の回りの環境地図」の作成を行っており、フィールドワークの経験を持っている。しかし受講者に

Discussing the social responsibility of the scientists in the classroom what was Hiroshima, and how should we teach it?

高校からの入学生もいるため、あらためてフィールドワークの概要を説明した。また、夏休みの広島におけるフィールドワークの説明を行った。

2）実際に地域を歩く〈6月下旬〉

教員が引率し、簡単な「地域巡検」を行った。ＪＲ目黒駅から目黒川沿いに、東急東横線の中目黒駅まで歩いた。周辺の侵食地形と坂道の関係、土地利用の変遷などを学習した。また「川の資料館」に立ち寄り、目黒川の生物や舟運の歴史、地下貯水池など治水の実態等を知った。

3）広島参加者による発表会〈9月中旬〉

8月の広島のフィールドワークの参加者により、発表会を行った。実習への参加を希望しながら日程の都合で広島へ行けなかった生徒もおり、活発な質疑応答があった。参加者はそれぞれが興味に応じたテーマについて、熱心に発表した。

4）フィールドワークの準備〈10月中旬〉

次回以降の三回で、生徒主催のフィールドワークを行うため、その準備の時間にあてた。まずグループ分けを行い、その後にグループごとのテーマの設定、文献調査を行った。班員の興味が多岐にわたるため、なかなかテーマが決まらない班もあった。その後の作業は各班に任せ、実施日までに準備をしておくこととした。

5）生徒主催のフィールドワーク①〈11月中旬〉

この日は本校中学3年生との合同学習の日で、十数人の中学生を高校2年生が引率するという形で行った。時間の制約もあり、あまり遠くに行くことはできなかったため、テーマの設定が困難であった。渋谷区郷土博物館に一緒に行き、各自でそれぞれ見学を行うといった内容になった。

6）生徒主催のフィールドワーク②〈1月上旬〉

文京区本郷へ出かけ、十数か所の坂道の歴史を調べ、ワークシートを完成させるという企画であった。また、歩測を用いて坂の長さを測ることも行った。この日も中学3年生の参加があり、共同で学習を行った。

7）生徒主催のフィールドワーク③〈1月下旬〉

高層ビルから副都心地域を眺め、土地利用を調査し、実際に地域を歩くという企画であった。世田谷区三軒茶屋にあるキャロットタワーの展望室、東京都庁展望台から眺めた。航空写真も事前に用意し、比較をすることで現在の副都心の形成過程を知ることができた。

3　広島実習報告　（大野新・宮崎大輔）

3.1　事前学習

広島におけるフィールドワークのテーマを設定することとともに、それについての事前学習を課した。また、昨年度の論集にもあった柳田国男著「空白の天気図」を事前に読了し、広島と原子爆弾についての予備知識を得ることとした。

3.2　実習の概要

日程：2009年8月6日（木）～8月9日（日）
行き先：広島県広島市
引率教員：大野新・宮崎大輔
参加生徒：2－2　田中瑞樹　中井雄太
　　2－4　大豆生田文也　小林慶一
　　武岳悠矢　中前信

3.3　主な行程

1日目午後　広島平和記念公園
　　平和記念資料館見学
1日目　夜　灯篭流し見学
2日目午前　放射線影響研究所見学
　　午後　広島女学院高校にて意見交換会
3・4日目　班別フィールドワーク

3·4　生徒が記録した旅行記

8月6日　　中井雄太

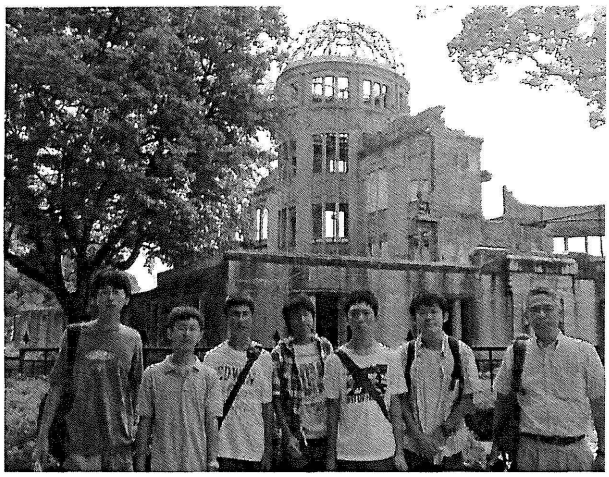
この日は朝早くに東京駅八重洲南口に集合し、広島へ向かった。「のぞみ」号乗車後、しばらくして平和追悼式が始まる時刻となったが、トンネルが多いうえ、皆乗車後配られた今回の研修に関する資料に目を通していたため、テレビ中継を見ることはなかった。配布資料の中で、広島女学院高校におけるディベートが英語で行われることを知り、皆で動揺した。チーム編成をよく見ると、参加者の6人中3人は日本人のみの班である事が分かり、彼らは安心していた。

広島には昼過ぎに着いた。長時間乗車でつかれた足腰を伸ばし、車外に出ると、真夏の広島が待っていた。広島駅を出ると平和追悼式が終わった直後ということもあり、駅前をはじ町中に人があふれていた。日本人だけでなく外国人も多かった。

宿に向かうために市電に乗車した。着いてみると、とてもきれいなホテルであったため皆で驚いた。チェックインの時間になっていなかったため、

フロントで荷物を預かってもらうこととなった。

昼食を摂り、広島市内観光へと向かう。昼食は「お好み焼き村」でとることとなった。ビルでエレベーターを降りると目の前に鉄板という情景に少し驚くが、時間も無いので近くの鉄板の前に座り目の前でお好み焼きを作ってもらい、おいしく食べてすぐに集合場所へともどった。ここからは原爆ドームへ行く道すがら昔からの地図店による。そこで大野先生より現状国土地理院が電子化を進め、地図の発行回数が減っていることを教えていただき店の方からお話を聞く。その後原爆ドームに到着。周りでは写真を撮る観光客や署名、募金活動に励む高校生がいた。また、川原ではライブと灯篭流しの準備が進められており、今日が本当に8月6日であることを実感させられた。



原爆資料館で各自解散となり、展示物を見て回るがあまりの人の多さに思うように資料が見られず少し残念だった。また、遺品のコーナーで一部外国人が笑いながら騒いでいたのが目に付き、とても腹が立った。周りに迷惑のかかるような行為をする人はすぐに出て行って欲しいと思う。他の人の邪魔である上、喧嘩にもなりかねない。さて、遺品のコーナーは上記の人を除けばまだ空いていて、展示物をよく見ることができた。中には焦げた血のついた服や、中が炭化した弁当などがありとても心に響いた。原爆資料館を出ると、ニュースなどで取り上げられていた「原爆ピアノ」の演奏会が開かれていた。だがこちらも人が多く、長時間見ることができなかった。しかしとてもやさしい音色が資料館周辺に響き渡っていた。

ここからホテルに戻る途中、原爆ドーム前を通ったところで、ニュースでもたびたび取り上げられ、話題であった「元航空幕僚長の田母神氏の『ヒロシマの平和を疑う』講演会」に対する反対デモが行われていた。それを横目に見ていたところそのデモ隊に黒塗りの右翼のバスが近づき、車外マイクで大音響で何かを怒鳴り始めた。この騒ぎが始まるや否や機動隊と思しき人が大量に走ってきて両者を取り囲み、暴動が起きないように押さえ込んだものの、両者は怒鳴りあい、いくつも物が飛んでいた。この事件は後に雑誌等で取り上げられるのだが、目の前で見てしまった私たちは唖然として路面電車に乗車した。デモ隊でさえあまり都心では見かけないうえ、衝突なんてまず見たことが無かったのでこの出来事は心に深く刻まれた。

8月7日　午前　　担当　中前　信

この日の午前中は、広島駅の南、比治山にある放射線影響研究所（以下放影研）へ訪れ、行われている研究の内容の説明を受けたり、終戦直後から使われている施設を見学させてもらったりした。

起床・朝食後、徒歩で30分ほどかけて比治山の放射線影響研究所へ向かった。そこで研究所の方による講義・施設見学を行った。その後、コートホテル広島からチェックアウトし、タクシーでホテルニューまつおへ移動。駅前の牛丼屋で昼食。

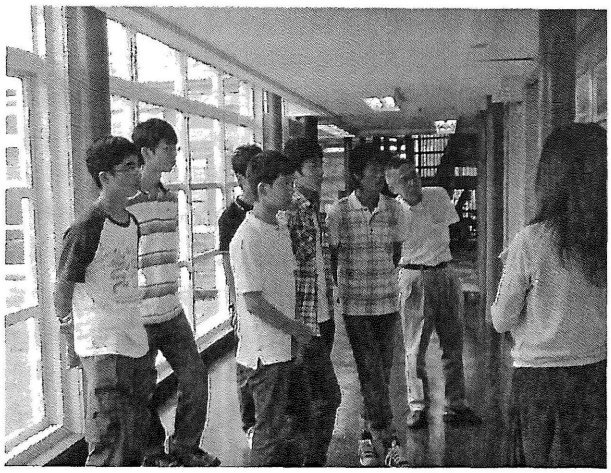
・放影研について

放影研は、1945年8月、広島に原子爆弾が投下された時の放射線被曝者への医学的・生物学的な影響を長期的に調査研究するために、終戦後の1947年にアメリカにより原爆傷害調査委員会（ABCC）として設立された。かまぼこ型の建物は当時のものをそのまま使っている。1948年からは日米共同研究となり1975年、現在の放射線影響研究所へと改組された。

研究所の方のお話の概要

研究所の方々が原子爆弾の威力や放射線が人体に与える影響についてわかりやすく説明をしてくださった。

自然界にも放射線は常に存在し、一般的な環境では一年間に約2ミリシーベルトを被曝している。（シーベルト：様々な種類の放射線の量を人体に与える影響の観点から統一的に表した単位）原爆投下時には、人体を死に至らしめることがある数千～数万ミリシーベルトにおよぶ放射線が広い範囲に放出された。



放射線による影響は、大量に浴びたことにより即死する初期的な影響にとどまらず、原爆投下から５年～10年後に被曝が原因と思われる白血病の死亡数がピークを迎える。その後も現在にいたるまでに、様々なガンによる死者が非被曝者に対して多く発生しているなど非常に長い間にわたる影響を残しているそうだ。

研究所では、原爆投下時にどこで、どのような状況で被曝したかを健康診断の際に一人ひとりに聞き取り調査を行い、それにより被曝した放射線の量を推定し健康状態との因果関係を調べている。また、ABCC時代は原爆投下の当事者であるアメリカによる一方的な調査が批判や反発を呼んだ教訓を生かし、被曝者の健康に関する相談を受けたり、医療機関の紹介を行ったりしていて、被曝者が気軽に調査に応じられるように努力しているということだった。

被曝二世（被曝した人から生まれた子供）に対しては、ABCCによる出生時の調査を始め数々の追跡調査が行われた。最近では遺伝子DNAを使った調査も行っているが、現在は被曝二世に対する健康影響はみられていないそうだ。そのため被曝三世に対する調査は行っているのか聞いてみたところ現在行う予定はないということだった。

施設見学の感想

その後行われた施設見学の際に、施設内には現在も検診に訪れる被曝者の方がいるため、それらの方の写真撮影は行わないように注意を受けた。被曝者の方の中には被曝したことを隠している人もいて、放影研ではそういった方々に対して最大限に配慮しているということだった。

放影研の施設は、終戦直後にアメリカが立てたものをそのまま使っているということで、木製の階段など時代を感じさせるものがあった。しかしそれと同時に施設の老朽化が進んでいるようだった。

放影研では数年前に新しい施設への移転が計画された事があったが、日米共同研究であるためアメリカ側の反対などで中止になった。ほかにも、予算をめぐりアメリカ側とのすれ違いが多くなり、案内をしてくださった方によると日米共同研究でありながら、アメリカ人の研究者はだんだん減ってしまっているそうだ。

このような大事な研究を予算の問題が邪魔をしているということは残念に思う。アメリカ側も当事者としての責任をもっと果たすべきだと思う。

・放影研を訪れての感想

現在の世界では核廃絶が大きな動きとなっている。広島・長崎の悲劇は二度と起こしてはならないが、放射線が人体に与える影響について調べることは広島で起こったことを世界に広く知らせ、より一層核廃絶が早く成し遂げられるためにも大変重要だと思った。

しかし、被曝者の感情の面もあり、理解を求め調査を行うことは大変難しいものであると思う。生きている人間に対する調査であるため時間も限られている。核廃絶のため、医学の進歩のため、たくさんの犠牲を無駄にしないで欲しい。

８月７日　午後　　担当　武岳悠矢

２日目午後には広島女学院高校において広島の高校生、及びハワイの学生との交流会が行われた。参加校は広島女学院高校、盈進高校、修道高校、Punahou Schoolと私たちである。まず、各校がそれぞれの学校の平和教育、あるいは家族の戦争体験などについてプレゼンテーションを行った。そ

の後、適当ないくつかのグループに分かれて話し合い、その内容を学校ごとにまとめ、各学校の代表者一名がスピーチをした。

今回、参加した高校は平和教育が盛んなところであった。たとえば女学院では6年間を通した体系的なカリキュラムで、広島だけでなく、長崎や沖縄、さらに日本の加害についても学ぶそうだ。東京の高校ではおそらくそのような授業は少ないだろうと言うと驚かれてしまった。しかし、広島の学校でもそうした教育は減っているとも聞いた。今回参加していた高校生の平和への意識の高さ、平和活動への熱心さに驚いたが、それはごく一部の人に限られたことであるとも感じられた。広島においても時が経つにつれて戦争の記憶は薄れつつあるのかもしれない。

考えたこと

僕の中でのこの旅行の一番の成果は、自分の原爆観が少しでも現実味をもったことである。資料館でみた被爆者の写真には特に衝撃を受けた。目を背けたくなるものばかりだった。もし自分の身に起こったらと考えると恐怖を感じた。核兵器は二度と使われてはならないものであると思う。しかし、どうしたら核を廃絶できるのか、ということになると、これは交流会でも大いに話し合ったテーマであるが、全くよい考えは出てこない。世界のほとんどの国が核の廃絶に賛成しているのに、ほとんど進展はないのだから、それが当然なのかもしれない。デモや署名運動などの市民活動によって保有国の世論が変わって、政治家がそれに合わせて核兵器を放棄する、ということはちょっと考えられない。

僕は話題のオバマ大統領をはじめ世界の核保有国の指導者、政治家たちに広島に行ってほしいと思っている。核兵器が生の人間にどんな影響を及ぼすのか知ってほしい。そのためには「原爆はアメリカの加害で日本の被害である」という側面を消し去ることが必要ではないだろうか（もちろん完全に消し去ってはリアリティーが失われるし、歴史として残す必要はある。あくまでも核兵器それ自体について考えるときのみ)。たとえば、アメリカの教育では原爆の使用が完全に正当化され、それによって核兵器についてしっかりと学ぶ機会が失われている。かなり良くないことである。原爆を使用したかどうかで戦争の死者数がどう違ったかなんて今となってはどうでもよいことだ。世界中の人が政治や国の立場に関係なく、ただ事実として核兵器によって人が、あるいは街がどうなってしまうのか知る必要があると僕は思う。

8月8日　　担当　大豆生田文也

・午前中は、広島電鉄で宮島へ向かい、厳島神社などを観光した
・午後は昼食を摂った後、アストラムラインを往復した

感想

・広島電鉄宮島線

同行者が「広島電鉄を全線乗りたい」と言ったため、行きは広島駅前から宮島まで路面電車で延々と向かった。当然だが、短距離利用の客がほとんどで、路面電車の区間（広島駅前⇔西広島）から宮島口まで乗り通したのは自分たちのほかは数人程だった。路面電車の区間では駅間が短く（大通りの向かい側にあることも)、表定速度も非常に遅かったが、西広島駅を過ぎて宮島線の区間に入ると専用軌道となり、多少は速くなった。

・宮島

巡検のメインは厳島神社だったが、自転車で島の東側にも向かった。

厳島神社は海の上に建てられているため、何度も水害に遭い、また、建物もそれを前提として作られている。(例えば、床板は固定されていないなど。）建物自体は何度も改築されているが、1000年以上の重みが感じられ、世界遺産に登録された理由がよく分かった。ちなみに、宮島には多数のシカがいて、昔から人に馴染んでいたという。自転車にまたがって地図を見ようと止まっていたら何匹もやってきて、ある班員は地図を食べられてしまった。

サイクリングでは東側の海岸に行き、帰りはメンバーの要望で旧道を通ることになった。すると、トンネルを抜けたところである班員の自転車のタイヤがパンクしてしまい、最終的には追加料金などは何も無かったが、かなり動揺した。

・アストラムライン

前回、鉄道研究会の旅行で広島を通った時にアストラムラインには1駅間だけ乗ったが、さすがにそれだけでは物足りず、また、書物やインターネットで調べるだけでは気づかないこともたくさんあると思ったため、実際に終着駅の広域公園前駅まで乗ってみることにした。

まず、始発駅の本通駅の改札を通って地下ホームに向かったが、この時点で乗客はあまり多くは無く、1両当たり12、3人ほどだった。途中の大町駅で大半の乗客が降りて、そこから先は自分たちのほかには数人の高校生だけだった。結局終点まで乗っていたのは他には2人ほどだけで、採算が合っているのか、心配になった。折り返し列車に乗り、上安駅で途中下車した。この駅では、建設工事の際に橋桁が落下して多数の人が犠牲になったという事故があり、現場の状況を自分の目で見て確認しようと思ったからである。さすがにその時の面影は残っていなかったが、少し離れた場所には慰霊碑があった。

8月8日　　小林慶一

13:00　広島城到着

15:00　広島城出発、市内を散策

感想

8日の午後はまず広島城に行った。予想していたほど天守閣は大きくなく、1957年に鉄筋コンクリートで再建されたもので、現在も残っているのは本丸と二の丸のみであった。広島城は毛利輝元が築城させた典型的な平城であったが、廃藩置県以後、城内には旧陸軍の施設が徐々に設けられ、建造物は次第になくなっていった。とくに明治7年には、本丸、三の丸で出火し、本丸御殿等も焼失し、大天守、中・裏御門、二の丸等を残すのみとなり、そして1945年8月6日、原子爆弾によって、天守閣をはじめ城内の建造物は全て壊滅してしまった。

原子爆弾によって広島に住んでいた人が大勢亡くなり、今も後遺症に苦しんでいる方がいる、と言われても、確かに原子爆弾を使用することはとても残酷で、非人道的なことだ、とは感じたが、あまりにスケールが大きすぎてあまり実感がわいていなかった。しかし、原子爆弾によって広島城の天守閣等が破壊された、という話を読み、それを破壊してしまうような原子爆弾は、使うことはもちろん、その存在さえ決して許してはいけない恐ろしい兵器であると心から思うことが出来た。

ちなみに、広島城は別名を「鯉城」とも言われているが、それは一説によると、広島城の付近一帯が己斐浦（こいのうら）と呼ばれ、己斐の音が鯉に通じることから呼ばれるようになったようで、広島東洋カープは、この鯉（carp）にちなんで名付けられたものであるそうだ。

8月8日　　田中瑞樹

三日目は終日自主研修であった。電車を調査する者や広島城を見学する者など各自のテーマに応じて出かけていったが、私と武岳くんは宮島と呉に行った。宮島を選んだ理由は世界遺産の厳島神社を見てみたいと思ったからであり、呉を選んだ理由は1日目と2日目で被爆地の空気を感じて、もっと戦争の歴史を知ろうと思ったからである。

午前中は宮島に行った。宮島は太古から人々の自然崇拝が行われていた。厳島神社は、推古元年（593）に佐伯部の有力者であった佐伯鞍職により現在の場所にご創建されたと伝えられている。仁安3年（1168年）、平清盛によって社殿がほぼ現在の姿に造営された。1555年には毛利元就が塔の岡の陶軍を急襲し陶晴賢を破る。晴賢は大江浦で自刃日本三奇襲戦の厳島合戦だ。昭和20年には枕崎台風襲来で社殿が被災している。平成8年、原爆ドームとともに世界文化遺産に登録された。日本三景、海と山と社殿の対照の妙が美しかった。

午後は呉に行った。呉市は、明治22年に呉鎮守府、明治36年には呉海軍工廠が設置され、戦前においては、戦艦「大和」を建造した東洋一の軍港、日本一の海軍工廠のまちとして栄えた。戦後においても海上自衛隊の諸施設がある。また戦前から培われてきた技術が新しい技術と結びつき世界最大のタンカーを数多く建造するなど、日本が戦後約10年で世界一の造船国へ発展する一翼を担う有数の臨海工業都市として発展した。

そんな呉で始めに行ったのが「大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館）」であった。大和ミュージアムは明治以降の呉の歴史と造船などの科学技

術を展示してあり、開館したのは 2005 年と新しい施設だ。中に入ってすぐに全長 26mもある 10 分の 1 スケールの戦艦大和が再現されていた。大和の模型の他、戦艦陸奥や重巡洋艦青葉の主砲身、零式艦上戦闘機六二型、“人間魚雷”回天 10 型（試作型）、などの海軍兵器の実物が展示されていた。1 階「展示室　呉の歴史」では日本の幕末から太平洋戦争終結までの戦史と呉海軍工廠の歴史、戦艦大和について、当時の記録映像の上映や歴史的資料等を展示し解説してあった。呉軍港空襲や広島市への原子爆弾投下に関しても呉から見えた攻撃の様子などが詳細に展示されていた。3 階「船をつくる技術」では、船を中心とした科学技術の原理を紹介してあった。

私たちは 1 階に 2 時間くらいいて展示を見て回ったが、学ぶことが多くあった。とくに呉が海軍工廠として発展してゆく歴史は勉強になった。また、戦艦についてわずかな知識しかなかった私でも、大和の世界 1 の造船技術には感心した。しかし疑問を抱いたこともある。世界一の造船技術があったならなぜそれを平和的に使えなかったのだろう、展示は戦前戦中と海軍工廠において培かわれた科学技術は、いまの時代にも受け継がれているということばかり強調されていないだろうか。もちろん若い大和の乗組員が死んでいったことの展示など平和を考えるものもあったが、来館者の中にはあきらかに戦艦を見てかっこいいとしか思っていないような人もけっこういたので、大和ミュージアムの目的の一つである、「平和を伝える」についてはあまりうまくいっていないのではないかと思った。この館は科学技術の発展を展示の基軸としているのだから、技術は先進的な良い面と、悲しみを生む要素を持っている点の、両方をしっかりと伝えてほしい。そうすればこの館の伝えたい“歴史、技術、平和”というものがもっとよく伝わると思う。この時思い出したのは前日のことだった。今回我々は 2 日目には放影研で科学者からみた原爆についてのお話を聞いた。そのときの科学者の責任、技術の使い方についてと同じことだと思った。

そのあとには海上自衛隊呉資料館に行った。鉄のクジラと呼ばれている潜水艦の中に入ったりした。広島市からさほど遠くない場所に自衛隊基地があることに驚いた。

私たちはこの日明確な研究テーマをもたずにフィールドワークをした。だがその場その場で興味のあることをしたおかげで、自由に行動できたし記憶にもたいへん残っている。今回広島で広めた見聞を大事にしたい。

8 月 9 日　　大豆生田文也

・午前は江波山の気象館を見学

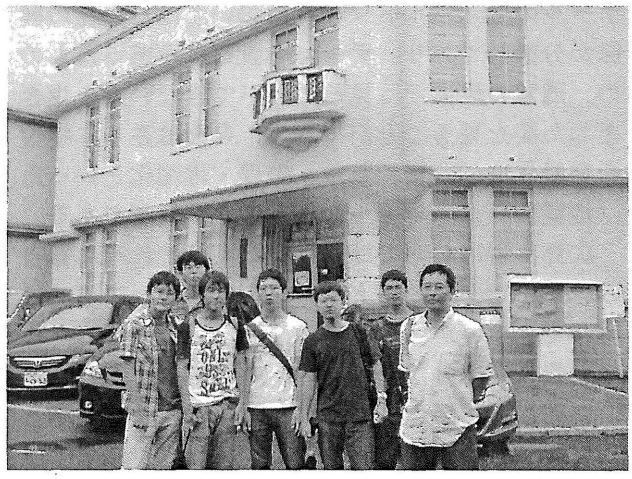
・昼ごろ新幹線に乗車、帰宅

感想

・江波山気象館

この気象館は元々「空白の天気図」に登場する広島地方気象台で、気象台が別の場所に移動した後、博物館として再出発した。現在では独自に観測と気象予測を行っていて、ウェブサイトで広島市内の予報を発表している。

そういうわけで実際に行ってみたが、正直展示内容は「小学生向け」のものが多かった。もっとも目的は「元気象台に行く」ということだったし、壁に刺さったガラス片などの貴重なものも見られた。



全体の感想　　中前　信

私は今回が広島へ行くのは初めてであった。東京以外の都市は神戸くらいしか行ったことは無かったので、東京とはちがった繁華街や街の様子を見ることができてよかった。神戸市も人口としては同じくらいだが、広島市は中国地方の中心都市となっているからか、さまざまな商業施設が集中していて違いが感じられた。また、広島というのは思っていたより観光都市という側面があり、たくさんの外国人がいたことも驚いた。また、戦後に都市計画が行われたためかどこも道が広く、路面電車が生き残ることができたのもこれのおかげだと思った。

また、広島女学院で行ったディベートでは、広島の高校生がとても積極的に核廃絶や世界平和について活動しているのを見て、とても感心した。本校を含めて東京ではあまり高校生による署名活動などは見たことがなかったので、単純にすごいと思った。実際核などの問題は様々な意見を持った人たちがいるので解決は非常に難しいと思うが、ハワイからの学生の話を聞いたりしていると、世代が変わっていくことで解決に向かうのではないかと思った。

今回の旅行の中で地理・国際問題などいろいろな角度から広島に触れることができた。また、ゼミで他の地域について調べる機会があると思うので、楽しみにしている。最後に広島のお好み焼きはとてもおいしかった。

4　おわりに

以上、今年度の高校２年生ゼミナールの概要と、生徒の感想による広島実習の記録を載せた。ゼミナールのフィールドワークにおいては、生徒の興味が分散しており、テーマの設定に戸惑ったものの、通常の授業では見ることができない生き生きとした姿を見ることができた。今後はさらに学習を発展させ、資料の収集・整理・地図化といった「地域調査」のレベルを行うことが課題である。

広島実習においては、生徒たちはそれぞれ独自のテーマでフィールドワークを行った。ここでは紹介できないが、広島市の交通をテーマにした詳細な報告もあった。

また、平和記念公園や平和祈念資料館の見学、広島女子学院高校における交流会では、戦争や原子爆弾の実態について知り、平和について考える機会を得た。このことは掲載した他のレポートにおいても見ることができる。

科学技術の発展とともに便利になり、生活が豊かになる、という側面がある一方、原子爆弾や戦争兵器への転用といった負の遺産も存在する。技術を扱うのが人間である以上、科学技術と人間社会のかかわり方を考えることは、今後の人類の存続・発展にとって必須の条件である。社会科の役割はここにあると考え、本校社会科においても継続して扱ってゆきたいテーマであると考えている。